

●特集●

第73回大会 コロナ禍の保育

会長挨拶

汐見 稔幸

本来でしたら、この号には、5月の大会の際に選ばれたはずの新会長が新会長としての挨拶文を書くことになっているのですが、周知のように、コロナ問題で今年度の大会は参集しない形で開催することとなりました。したがって、新理事会（新しく選挙されて選ばれた理事による会議で、例年大会時に開催されることになっています）は開催がかなわず、そこでの重要案件である会長選挙も行うことができませんでした。

その後、可及的速やかに理事・評議員会、社員総会、新理事会を開催しようと状況を見ながら慎重に判断をしてきたのですが、これ以上延期するわけにはいかないということで、2020年7月25日に新理事のメンバーに東京に集まっていただき新理事会等を開催しようとしました。しかし、コロナ問題が再び深刻化してきて、新理事の方々には職場より、東京に向かうことは自粛してほしいという要請も多くあって、参集して開くことができませんでした。理事会・評議員会、社員総会、新理事会等はオンラインでも開けますが、会長選挙だけは重要で慎重に行うべき案件ですから、参集してどのような状況にも対応できるような形で行うと決めていました。そのため同日にオンラインで理事・評議員会、社員総会そして新メンバーによる新理事会を開催しましたが、会長選挙だけは行えず、会長選挙を延期するということが決まりました。いつまで延期するか、種々議論を交わしましたが、結局来年度の大会まで延期することが決まり、その結果、現会長である私が、それまで会長の仕事を続けることになりました。新しいメンバーによる新たな学会運営を期待されていた会員のみなさまには申し訳ないのですが、何卒事情をご理解いただければと願っています。

さて、コロナ問題は、保育の現場に数々の不安と戸惑いを生み出し、また大学等の教育機関でも参集しない形での授業の工夫等が課せられ、養成校では保育の実習ができない状況が続いています。学校は休校になっても保育所は休所にならず、その違いをどう理解するか、学問的にも検討すべきことが、急

速に浮かびあがってきた現実があります。

他方で、幼児教育機関に通わせている保護者にも自粛要請が行われた時期、多くの保育・幼児教育機関は、普段とはまったく異なる環境、条件での保育を行うことになりました。その中で、これだけ子どもの数が減ると、こんなにいい保育ができるということに驚いたという声が多く上がるようになりました。来年からは定員を半分に減らし、保育料を2倍にして、保育の環境を全面的に変えたいという幼稚園まで出てくるようになっていきます。無償化だから、もとの保育料を払っていただければ、もっといい保育ができるということを保護者に納得してもらおうというのです。

これは、コロナ問題という危機の中で、わが国の保育条件・環境がヨーロッパ諸国等に比して劣っていることが、逆に照射され、鮮明になってきたことを表しています。保育所の最低基準といわれた基準が、長年改善されないで、数を増やすことが行政的に追求されてきたことの問題点が、コロナで鮮明に浮かび上がってきた、ということでしょう。

現在の本学会の課題の中で、保育が社会の大事なインフラになってきた時代の人間形成の大事な部分を担えるよう、保育の質を向上させる努力をすることが大事であることは当然ですが、コロナ禍の中で、保育が長く目指してきた条件改善をこの際実現していこうという動きができてきていることは重要なことと思っています。

全国で、コロナの前に戻るのではなく、コロナを経たからできたという新たな改革への動きが起こることを期待しています。

第73回大会の特集記事を掲載する予定であった178号ですが、新型コロナウイルスの関係で、大会を参集しない方法での実施となったため、内容の変更を余儀なくされました。しかし、広報委員会の皆様のお知恵によって、新型コロナウイルスに対応するための現場の苦悩や今後の方向性などについての記事を掲載しました。

第73回を終えて

第73回大会実行委員長 横山 真貴子

2020年5月16日・17日に奈良の地で開催を予定していた日本保育学会第73回大会（近畿ブロック主催）は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、「大会は成立したものとするが、開催期間に会場には参集しない」形で開催されました。会員のみなさまには、こうした開催形態をとらざるを得なかったことへのご理解とご協力を頂き、心より感謝しております。

5月16日当日、奈良では雨でしたが、翌17日は爽やかに晴れました。まぶしい新緑の中、のんびりと草を食む鹿たちの姿を見ながら、この美しい季節にぜひ皆様に奈良に足を運んで頂き、本大会のテーマ「保育の“とこしへ”と“うつろい”」をめぐって議論を重ねたかったと、とても残念に思いました。

参集は叶いませんでしたが、最終的に口頭発表249件、ポスター発表733件、自主シンポジウム61件と、多数の参加を頂きました。また以下の3つの企画につきましては、ご登壇の先生方にご尽力頂きWEBでの開催を行うことができました。

基調講演『ヒトの心の成り立ちをたどる－発達と進化の基盤－』では、京都大学の明和政子先生に、生物としての「ヒト」の視点から「ヒト」らしさとは何かについてお話し頂きました。ヒトは「身体」を介して他者から学習する存在であり、他者と強く結びつきながら進化してきた社会的生物であること、それゆえコロナ禍にある今こそ、共につながりながらこの苦難を乗り越えていきましょう、とエールを送って頂きました。

汐見稔幸会長からは、特別講演『SDGsと保育－その課題性と思想性をめぐって－』と題して、その背景にある思想・哲学からSDGsと保育の結び付きを示して頂きました。「暮らし (life)」の当事者として、私たち皆が未来世代の権利を見据えつつ命を軸に生き方を問い直すこと、保育の原理や実践を見つめ直すことで未来につなぐ新たな保育の哲学を生み出し、歴史の中に位置づけていくこと、これらが今後の課題であるご教示頂きました。

副会長の大豆生田啓友先生には、実行委員会企画シンポジウムA『保育の“とこしへ”と“うつろい”－倉橋惣三と日本の保育の今とこれから－』において『倉橋惣三の保育論から考える現代の「新と真」』をご講話頂き、日本の保育について、倉橋の理念と現在の保育実践を行き来しながら具体的な子どもの姿を交えてお話し頂きました。保育の「真」とは子どもへのリスペクト（尊厳）であり、ここから保育が始まること。心に響きました。

3人の先生方のお話は、生物としてのヒト、人間の世界的課題、そして日本の保育と緩やかにつながり、今だからこそ保育の基本や根本を見つめ直し、何かに真に大切なことなのかをしっかりと見据え、明日に向かって歩いていくことの大切さをお伝え頂いたと思います。いつの世も、いかなる時も、今を生き、未来に向かう子どもたちのために、歩みを止めず、ともに進む。今大会が新たな時代の保育を問う契機となることを願います。

●Profile

横山 真貴子（よこやま まきこ）

奈良教育大学教育学部 教授

子どもたちが暮らす保育・教育の場に身を置き、子どもの視座から、言葉の育ちを描き出すことを目指している。絵本や伝え合い、文字との関りに焦点を当てながら、幼小接続についても現場の先生方と共同研究を進めている。

◆会員専用ページにログインしてください◆

ご登録情報をご確認いただき、メールアドレスのご登録をお願いいたします。ご住所・所属先等のご登録情報の更新もご自身で行っていただけます。学会からの郵便の不着が発生しておりますので、ご協力をお願いいたします。

なお、会員専用ページにログインできない場合は、学会ホームページのお問い合わせフォームよりご連絡ください。

退会をご希望の場合も、学会ホームページのお問い合わせフォームよりご連絡ください。

コロナ禍の保育を考える

突きつけられた教員としての「新しい自分」

北川（桑原） 公美子

遠隔授業が決定した時「絶対に無理！」と思った。動揺しなかったのは情報処理担当の教員くらいだろう。だが授業を成立させ「保育者を目指す学生が免許資格を取得する体制を維持すること」は養成校のデッドラインである。そこには教員に多少とも許されている「自由（＝イヤ）」はない。Zoomについて調べ、学びを可視化するためにe-ポートフォリオの改修を行った。マニュアルを作成し全教員の研修と学生への説明。1年前であれば絶対に拒否しただろう。「対人関係の仕事なのだから授業も対面式が当然」という立派な口実もあるし……。だが今は保育者養成における遠隔授業の可能性を考えられるまでになった。それは学科の先生方の柔軟な姿勢の影響である。学生の学びのために新しいやり方に全力で取り組み、しかもそれを面白がる様子も見られた。やり慣れた自分の世界を変えられることはかなりキツイ。自分の経験を盾に守りに入ろうとしてしまう。だが、新しいことに立ち向かい、それを楽しむ気持ちを自分自身が持てなければ、新しい世界に飛び出し自分の居場所を作らなければならない学生を、本当の意味で教育することはできない。今回のことで、それを突きつけられた気がする。

●Profile

北川（桑原） 公美子（きたがわ（くわはら） くみこ）
東海大学短期大学部児童教育学科 教授
歴史的観点から日本の幼稚園教育を捉え、教材としての童話やその話し方などに関心を持っている。保育学や児童文化だけでなく、小学校教育や児童文学とのかかわりを含めながら、その時代の社会や教育界における幼稚園教育を明らかにし、そこから「未来の保育」を考えていきたい。

新型コロナウイルス感染症に負けないぞ！

笹山 雅司

札幌市立幼稚園の9園では、学校が臨時休業となった2月28日以後も家庭での保育協力を依頼する形で保育を続けていた。4月22日には警戒都道府県に指定されたことを受けて5月末まで臨時休業となり、就労等で数名の預かり保育児を受け入れ、園が密にならないよう、預かり保育対応の教諭と、園長、主任は勤務し、他職員は自宅勤務等で、教材準備や保育計画、保護者への発信のための教材作り等をしていった。

刻々と変わる情勢に市教委からの通知や対応策等の情報を園長同士で共有し、保護者には、園発信の保護者メールとHPを活用して周知した。園児向けには、養護教諭が「新型コロナウイルス感染症に負けないぞ！」の紙芝居を作成、他にも家庭でできる簡単製作・料理のレシピや体を動かす遊びの紹介等を作成し、園HPにアップして園からのメッセージを伝えた。また、園庭の植物の生長や池の生き物などの様子を継続して知らせる等、園再開時の登園に期待がもてるよう取り組んだ。

6月から保育が再開され、園児は新型コロナに負けじと、虫探しや砂・泥・水遊び、鬼ごっこなど、戸外遊びを中心に夢中になって遊びながら、心も身体も思い切り動かし互いに育ち合う姿が見られてきている。

●Profile

笹山 雅司（ささやま まさし）
札幌市立もいわ幼稚園 園長
幼稚園教諭、指導主事を経て、園長7年目。子どもたちの遊びを「面白がってみる」ことから願いや思いをくみ取り、心動かして「科学する心」（ソニー教育財団のテーマ）を求め、遊びをより深く、楽しくすることが好きで「笑顔がいっぱい楽しさあふれる幼稚園」づくりを目指す。子どもと作るドキュメンテーションを模索中。

コロナ禍の中で、私たちに求められていることは何だろうか？

木村 裕依菜

2020年2月末から、私たちは『保育を止めない・孤立をさせない』という2つの方針を立て、保育や家庭支援にあたっている。

特に、自粛期間中だった2か月間は、各家庭が孤立せず、園とのつながりをどのように感じるができるのかということが課題であった。

そこで、『音楽』『親子運動』などの4プロジェクトを立ち上げ、家庭で楽しめる企画や遊びを保育者それぞれが考えた。YouTubeでの親子体操や歌の配信、1週間に2度、親子工作キットを含めた家庭で遊べるキットの郵送、また、各家庭で作ったちぎり絵などを園に送ってもらい、それを保育者がつなげて1つの大きな木や絵を完成させる企画も行った。

さらに、長時間家の中にいる親子が心身ともにリフレッシュできる場を提供したいと、登園児と交わらないよう、場やメンバー、時間を区切り園庭開放を行った。

6月から本格的に保育が再開した今は、自粛中の経験を共通点として、遊びを子どもと紡ぎ出している。

コロナ禍だからこそ、変化を恐れず、子どもが置かれている場の強みを活かした援助とは何かを模索し続けていきたいと考えている。

●Profile

木村 裕依菜 (きむら ゆいな)
認定向山こども園
保育記録を保育の質向上に活かすシステムの研究を行っている。ナラティブな記録に、遊びやメンバー構成などをタグ付けし、ICT技術により必要な情報をデータベースより絞り込むことができるシステムを構築し、保育者の振り返りや子どものアセスメントに活かせるよう、実践的研究を行っている。

コロナ禍中での支援センターの対応

軽部 妙子

M市では2度自粛が実施された。

1度目は県内で感染者が出始めた頃に、市内5支援センターと担当課で会議をし、独自での自由開放自粛を決定したが、個別対応は各センターの裁量となった。

当団体では、利用者と支援者の想いのキャッチボールをする為に、直近利用者に往復葉書で子への想いやセンターでの思い出、今どんな過ごし方をしているかのメッセージを募りHPで紹介した。予約利用、電話、メール相談は随時可能等も併せて伝えた。

ひろば利用は完全入れ替わり制とし、消毒を徹底した。スタッフもリスク回避の為2交代制、新対処マニュアルも作成した。

2度目は緊急事態宣言時の自粛だ。前回同様、利用者同士やセンターとの繋がりを大切に、身近な人からの情報を発信し続けた。HPには遊び方、今の気持ち、クラフトや親子クッキングの紹介、地元新聞にも働きかけ前向きな過ごし方の掲載依頼をした。

解除後の対応としては、自粛期間の聴き取りを実施し、張り詰めた気持ちを和らげ、過ごし方に自信を持ち次に備えてもらうと共に、利用者視点での要望を聴きながら今後の対処を考慮している所だ。

●Profile

軽部 妙子 (かるべ たえこ)
NPO法人あんふあんねっと 代表
平成17年度やまなし女性未来塾Aグループ有志で立ち上げたNPO法人あんふあんねっと第三代表。在宅子育て家庭に対する「親のエンパワメントを引き出す支援とは？」をテーマに当事者目線の支援と自立のバランスを現場の立場から探っている。地域子育て支援拠点、親子カフェ、家庭訪問型子育て支援を主に実施している。

児童福祉コース開設2年目は、新型コロナウイルス感染症の対応とともに

丸谷 充子

家政福祉学科は、2019年度に保育士資格が取得できる児童福祉コースを開設したばかりです。家政・福祉・保育の3分野のカリキュラムから学ぶことができ保育士資格と家庭科教諭免許、社会福祉士受験資格を取得することができます。新コース開設2年目はコロナ対応とともに始まりました。大学全体で4月は自宅待機、5月中旬から遠隔授業が始まり、6月中旬から一部の演習、実技科目で集合授業を行っています。遠隔授業は主にmanabaで学修する方法で、YouTubeによる授業、Zoomによる双方向の授業も行われています。学外での体験が難しいため、画像、映像を活用しています。自宅にピアノやキーボードを持たない学生にはキーボードを貸し出しました。授業の工夫の一部を紹介すると、わらべうた遊びや手遊び歌の体験ではYouTubeで動画を配信して旋律や実際の動きを伝え、制作では各自で制作した絵本を動画で撮影して提出し自宅から視聴する発表会を行ったそうです。集合授業の表現の授業では、マスク着用、手指の消毒など万全の対策をとったうえ、密と接触を避けて「生えた場所から動かずに草花になって風を感じる」表現活動を行ったそうです。

●Profile

丸谷 充子 (まるや みつこ)
和洋女子大学家政学部家政福祉学科 准教授
保育士資格関連の科目を担当。研究テーマは、子育て・家族支援に関する支援者の専門性とストレス。近年は、専門性の中でも、必須と言われながら詳細が明らかにされていない多職種・多機関連携に関心を持ち、所属機関内の連携、関係機関間の連携の詳細を検討している。

コロナ禍での保育

後藤 春美

緊急事態宣言を受け、登園してくる子どもの数も激減し、職員も交代でテレワークによる勤務体制をとった。6月に入ると、登園してくる子どもが多くなってきた。どうすれば子どもたちに「離れなさい」と言わずにソーシャル・ディスタンスを保てるか、職員間で話し合った。例えば普段使わない非常口を通常の出入り口として活用したり、テントの足組に寒冷紗をかけて日陰を多く作ったり、給食も遊戯室をランチルームとして実施するなどの工夫を行った。これまでの固定観念を捨てて、臨機応変に環境を整えた。

4、5歳児に感染症予防に関する話をする、多くの子どもが「知ってる」と話す。しかし、なかには支援を必要としている子どももいる。なぜお友達と距

離を取らなければならないかを、寄り添いながら言葉にして丁寧に接するようにした。未知のウイルスに立ち向かう時代になってしまったが、「自分たちがどうしていかなければならないのか」を、自分で考えようとする子どもに育てていかなければならない。

例年、当たり前のようにやってきた園行事を今年度はできないかも知れない。その中でも子どもの育ちに必要なもの・環境は何かを、職員間でじっくり考え、厳選していきたい。

●Profile

後藤 春美 (ごとう はるみ)

古知野西保育園 園長代理

子どもの声に耳を傾けながら環境を整え、子ども主体の保育を実践。子ども自身が考え遊ぶ姿に、生きる力や考える力の無限性に感動している。今年度は保育者同士、互いの保育を振り返り、より丁寧な保育を考えることが、保育の質の向上に結び付くのではないかと研究のテーマにしている。

海外レポート①

〈韓国・ソウル市子育て総合支援センター訪問調査〉から

九州産業大学 清水 陽子

韓国の幼児教育界は、「子どもたちが幸福で、父母が安心できる世の中」の実現を目標として掲げた、「幼児教育発展基本計画」(2018-2022)の策定によって、新しい局面を迎えたといえる。そして、この政策目標の下で様々な幼児教育・保育改革が進められている。周知の「2019改訂ヌリ課程」は、その代表的な事例の一つである。私は、こうした状況下で新しく動き出しつつあるソウル市の幼児教育・保育の実際を知るために、2018年8月～2019年3月にかけて、ソウル市子育て総合支援センターおよび漢南区子育て総合支援センターを訪問調査した。ソウル特別市は韓国の首都機能を有している経済特区であり、そこでは核家族の共働き世帯が多く、子育て支援への需要がとりわけ高い地域である。

私が訪問した「ソウル市子育て総合支援センター」は、①質の高い保育 ②エキサイティングな育児 ③幸せな子どものための健康育児の実現 ④ネットワーク連携に協力体系の基盤構築 ⑤安全で信頼される保育サービスの質の向上 ⑥共感と意思疎通がある子育て支援の強化を目的として設置されている公的機関である(2003年創立)。具体的な業務内容としては、①一時保育サービスの提供、②保育に関する情報の収集及び提供、③保育プログラムと教材・教具の提供及び貸与、④保育者の相談や求人・求職情報の提供、⑤保育園設置運営等に関する相談やコンサルティング、⑥障害児保育など虚弱児保育に関する情報の提供、⑦保護者の子育て相談と教育、⑧乳幼児の体験と遊びの空間

を提供、⑨乳幼児の保護者と保育者の乳幼児虐待予防教育、⑩その他保育園運営と家庭での子育て支援等に関して必要な事を実施すること(「乳幼児保育法第26条の2」参照)で、驚くほど広範囲である。

私はこの訪問によって多くを学んだが、ここでは以下の2つを指摘したい。第1に、地域の子育て家庭を対象に「おもちゃライブラリー」を設置し、おもちゃや絵本を貸し出している事である。この事業は韓国各地域の支援センターでも実施されている。目的は、経済的な理由による保育の質の格差解消にある。第2に、保育者の派遣事業と、臨床心理士による保育者対象の相談事業の実施である。このような保育園の「保育の質の担保」として人的支援をしていることに、特に関心を持った。



おもちゃライブラリー

リレー討論 「教育・保育の無償化」—令和時代の保育学— II

「保育者が子どもと保護者に寄り添うための無償化」を問う

黒田 秀樹

「国家戦略としての幼児教育」という言葉を耳にして

確か小泉内閣の頃だったと記憶している。もう15年ほど前になるのだろうか、「国家戦略としての幼児教育」という言葉を初めて耳にした。日本の政策の柱に幼児教育を位置づけていくという政策展望の宣言である。

当時、私としては驚きを持って受け止めていた。長年、幼児教育・保育の場に身を置く者として、正直、やっと日の目が見えたという思いがしたからである。幼児教育・保育の重要性が認知されたという嬉しさでもあった。それまで、幼児教育・保育は日本の主たる政策として特に取り上げるほどでもない分野という認識が多くの方々の中にあつたことは否めないからである。

この政策にはヨーロッパ等の先進諸国の状況や世界最大のシンクタンクとも呼ばれているOECD（経済協力開発機構）の分析研究やノーベル経済学賞授賞のジェームズ・ジョセフ・ヘックマン（James Joseph Heckman）教授の研究等が少なからず影響を及ぼしていることも伺える。つまり、これらの示唆するところは、幼児教育・保育は公的な支えによってこそ「質」を高め、また、それは将来、国に大きな果実を生むプロセスを創るということであつた。

「無償化」に何かしら腑に落ちない感が浮かんでくるのはなぜか

今、そんな「国家戦略としての幼児教育」の流れを汲んで「幼児教育・保育の無償化」は実現している訳だが、実施されてみて、私自身に何かしら腑に落ちない感が浮かんでくるのはなぜだろうか。

無償化は、確かに保護者にとって、高い保育料を払わなくても良くなるので大歓迎であろう。保育現場でも、毎月負担に感じていた保護者の嬉しい支えとなっているのは明らかに伝わってくる。経済的理由によって幼児教育・保育が受けられないことは理不尽であろうし、すべての子どもが必要な保育を平等に受けられる国こそ豊かな国であるとは確かに言える。

しかし、前述したように、なぜ「何かしら腑に落ちない感が浮かんでくる」のであろうか。それは「無償化」は詰まるところお金の問題だからである。つまり「無償化」は幼児教育・保育にどれだけお金をかけるかを考え、それらの経費を賄う保護者負担の軽減を果たすべく公費の投入の在り方を決定した制度であるからである。

「腑に落ちない感」とは、無償化は幼児教育・保育

の「お金」の問題にかかる「保護者負担」を軽減するという点について、確かに一定程度の解決は見えたものの、果たして一番大事な幼児教育・保育の「質」を高めることに影響を及ぼしたのかという懸念である。

幼児教育・保育の「質」を高めることと「無償化」

幼児教育・保育の「質」を目指していく中、「無償化」は、「質」の向上に寄与するのか疑問を持たざるを得ない。「保育料がただになる」というレベルで留まっているような空気を感じるのは私だけであろうか。

ある保育士から聞いた話であるが、保育園に通う子どもの保護者を「利用者」と呼ぶということである。保育を「サービス」と呼ぶ所もあるようだ。「保護者利便性」や「顧客満足度」というワードも幼児教育・保育の「質」の評価チェック項目とする向きも散見できる。そんな状況の中にと「無償化」も保護者を「お客さま」という捉え方で関係を築いていくディスプレイのひとつではないのかという思いがしてしまう。「保育料はただ」だからお得ですよ！感覚は漂いかねない。それは「質」ではないだろう。

幼児教育・保育の「質」とは何かということについては、最近、さまざまに論議が高まっているが、「質」を語る土台は「保護者」と「保育者」そして「地域」が幼児教育・保育について共感できるものを共有していることであると思っている。それは、子どもたちと一緒に過ごすことの人生の豊かさを感じていくことである。

保育園や幼稚園から聞こえてくる歓声や歌声を回りの大人が楽し気に耳を傾ける雰囲気、子どもたちが安心して園外に出て散歩などができる地域、そして何より集団の場で子どもたちが日々成長していることを、皆で喜び合える幼児教育・保育への理解があつてこそ「質」は高まっていく。

保育者と「無償化」の行方

皆で喜び合える幼児教育・保育への理解は、まず、現場にいる保育者が核になる。保育者自身が、今、そこにある幼児教育・保育に充実感や喜びがあるからこそ周りに広がっていくからである。しかし、一人の保育者が受け持つ子どもの数（職員配置基準）は決して良いとは言えず保育の長時間化に伴い現場は多忙化し、給与処遇面についての課題も大きい。資格を持った保育者が現場に就職することを敬遠さ

せてしまう現実もある。「無償化」は、保護者に経済的な負担を軽減することは実現したが、内部の人的条件を豊かにすることはない。それらは、保育者が子どもと保護者に寄り添うためには、大きな課題である。「質」を向上していくためには、日本の保育の構造的な改革こそが求められる。「無償化」は、その土台として組み立てられたと望みたい。今後、その土台の上になどどんな構造が建てられていくのか行方を見守りたい。

●Profile

黒田 秀樹（くろだ ひでき）

学校法人黒田学園理事長・きらきら星幼稚園長。

財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構理事、福岡県幼児教育アドバイザー、福岡女学院大学非常勤講師・東筑紫短期大学非常勤講師。保育実践の場から学ぶ保育の質や環境の構成について研究を行っている。

海外レポート②

外出禁止中のアメリカにおける幼児教育を続ける取り組み

大阪国際大学短期大学部 吉田 貴子

現在、新型コロナの影響で海外へ視察に行くことが難しいため、外出禁止中のアメリカに住む友人から幼児教育の取り組みを聞いた。

サンフランシスコの私立幼稚園でインターンシップをする岩本茉莉さんによれば、先生と子どもたちや、先生と保護者とのZoomによるオンラインセッションが行われている。毎朝9:30-10:30まで、9-11人の子どもたちが参加し、参加者全員の顔が見られる。これは、全ての子どもが家庭でデジタル機器を使えたからできたが、デジタル機器やWiFiが使えない家庭の子どもがいる園では、先生がYou Tubeに家庭でできる活動やエクササイズ、絵本の読み聞かせや歌の動画をアップしているそうだ。

またその月に子どもが使う活動の材料や道具を個別に詰めて園の玄関先に置き、保護者に取りに来てもらう。その材料を使った製作物の作り方や遊び方は、Zoomを使って伝えられる。

オンライン幼稚園ともいえるこの取り組み後に、

保護者へのアンケートも実施された。家庭学習（ホームスクール）を選び、オンライン幼稚園に参加しない保護者もいるが、先生や他児とのつながりを喜ぶ声があるとのことだ。

もう1人の友人でスタンフォード大学保育園の保育士ヘレン・モスマンさんによれば、この園でも家にあるもの（ペットボトル、缶、空箱など）で演奏する動画や、箱の中に家にあるCDやガラスの置物などを自由に置いて光をあて、光と影で自分の気持ちを表現しようといった活動がオンラインで子どもたちに紹介された。

外出禁止や自粛下に、様々な家庭の子どもの教育を保障していくことは国の大きな課題である。アメリカと日本では1クラスの子どもの人数も違うが、グループ分けしてオンライン教育に取り組むことや、教材を渡すことは可能だろう。今後、幼児教育関係者は、オンライン教育を含めた学びを保障する方法を検討する必要があると考えさせられた。

私の文献リストから

このコーナーは、保育実践の発展のために会員諸氏が読まれている参考文献の紹介を目的とします。

角野 雅彦 (鹿児島国際大学)

1. ポール・タフ、高山真由美訳 (2013) 成功する子 失敗する子—何がその後の人生を決めるのか—. 英治出版.
2. ポール・タフ、高山真由美訳 (2017) 私たちは子どもに何ができるのか—非認知能力を育み格差に挑む—. 英治出版.
3. ウォルター・ミシエル、柴田裕之訳 (2015) マシュマロテスト—成功する子・しない子—. 早川書房.
4. ジェームズ・ヘックマン、古草秀子訳 (2015) 幼児教育の経済学. 東洋経済新報社.
5. ルーシー・クレハン、橋川史訳 (2017) 日本の15歳はなぜ学力が高いのか?—5つの教育大国に学ぶ成功の秘密—. 早川書房.
6. ピーター・グレイ、吉田新一郎訳 (2018) 遊びが学びに欠かせないわけ—自立した遊び手を育てる—. 筑地書館.
7. ジョン・ハッティ、山森光陽監訳 (2018) 教育の効果—メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化—. 図書文化社.
8. 荒巻草平 (2019) 教育格差のかくれた背景—親のパーソナルネットワークと学歴志向—. 勁草書房.
9. 中村高康・平沢和司・荒巻草平・中澤渉編 (2018) 教育と社会階層—ESSM全国調査からみた学歴・学校・格差—. 東京大学出版会.

10. 無藤隆編著 (2018) 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿. 東洋館出版社.

【研究内容】

2002年度施行の学習指導要領では、子どもたちの問題解決に至るまでのプロセスを考えぬく力、知的な好奇心、創造力が重視され、以後わが国の教育は、問題解決型学力の育成を目標にしています。また近年、カリキュラム改革の世界的動向として、乳幼児期からの知的教育や学びの在り方が注目されるようになっていきます。

その理由は、教育のみならず様々な領域で、乳幼児期の育ちと環境が、長じて学齢期以降の学力、とりわけPISA型学力と称されるような知識の活用力、さらには人生そのものにまで影響があることを示す報告が相次いだからです。こうして日本でも欧米でも、保育者や周囲の大人、そして仲間との豊かな関係性を育む保育環境、知性を育てる遊びの重要性等、乳幼児期の質を高めるためのさまざまな議論や実践研究が続いています。

子どもたちの現在と将来の生きる力を高め、21世紀型の人材養成と教育格差是正に挑む、新しい保育カリキュラムを研究していきたいと考えています。

中岡 雄介 (京都市立中京もえぎ幼稚園 教諭・京都教育大学大学院 大学院生)

1. 古賀松香 (2019) 保育者の身体的・状況的専門性と保育実践の質. 発達158. ミネルヴァ書房
2. 畠山寛 (2018) 自由遊び場面における保育者の「フレーム」を通じた状況理解と子どもへの関わり—保育者の語りの分析から—. 保育学研究第56巻第3号、297-308
3. ジョン・ヴァン＝マーネン. 森川渉 (訳) (1999) フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法—. 現代書館
4. 無藤隆 (2013) 幼児教育のデザイン. 東京大学出版会
5. 沖潮 (原田) 満里子 (2013) 対話的な自己エスノグラフィー語り合いを通じた新たな質的研究の試み. 質的心理学研究第12号、157-175
6. 苦野一徳 (2014) 教育の力. 講談社
7. 細川太輔 (2010) 学生の学び合いによるフレームの明確化—協働学習のアクション・リサーチの教育実習に向けて—. 国語科教育67巻、35-42
8. 佐藤学・秋田喜代美・岩川直樹・吉村敏之 (1991) 教師の実践的思考様式に関する研究 (2) —思考過

程の質的検討を中心に—. 東京大学教育学部紀要 31、183-200

【研究内容】

保育者が保育実践を紡いでいく過程について、実践者の立場から研究しています。保育では、無数にある選択肢の中から、瞬間的・直感的・連続的に意思決定し、行動しています。意思決定には、目の前の子どもの様子、保育者自身の願い、課題意識、過去の保育の経緯、その時の状況、経験則、価値観、園の文化などの要因が複合的に絡まり合っていると考えられます。

特に私が興味をもっているのは、意思決定や行動の基となる感情や心構えはどのようなものなのかということです。保育者は、再現性のない保育で経験を積み重ねることで経験則や考え方、信念などを築いていきます。それらを頼りに、今、目の前の保育をどのように実践するのか、自らの実践から保育実践をホリスティックなままで表せるように模索しています。

新刊図書の紹介

このコーナーは、会員諸氏が読まれた多様なジャンルの図書を保育学の視点から紹介していただき、保育研究と保育実践の発展のための一資料を提供することを目的とします。

『現代の教育にどう取り組むか 保育・子育てへの展望』

小川博久 著、小川清美 編集
2020年4月30日 わかば社

本書は昨年逝去された保育学会の元会長、小川博久先生が一般財団法人福島県幼児教育振興財団の「研究紀要」に執筆された論文を書籍としてまとめたものである。「学校教育」「家庭」「遊び」「生活」「子育て政策」など、多様な観点から保育に関する提言がなされている。その提言は、我々が現代の保育問題に対する処方箋を考えるとときのヒントに満ちている。遊びの意義に関する章に、「学校での学びにつながる遊びの学びの再生を」という記述がある。現在、我が国の学校教育は、小学校以降の学校教育と就学前教育との関係の中で、幼稚園等では遊びを通じた総合的な指導を行うことを前提としている。この、遊びを通じた指導は果たして今、本当に「当たり前」になっているのだろうか。本書に示される、現代の学校の現状分析と提言は、就学前教育における遊びが、なぜ学校教育との接続において大きな意義をもつのか、保育に関わる者の認識を新たにさせてくれる。

高橋 貴志 (白百合女子大学)

『行列のできる児童相談所 子ども虐待を人任せにしない社会と行動のために』

井上景 著
2019年11月 北大路書房

保育者養成校の教員として、「子ども主体の保育」の実践について学生と議論してきたが、児童虐待の問題をどのように取り上げればいいのか悩む。

そもそも児童相談所の役割を、深く知らずに授業を行っていることが、自分の大きな問題であり、「児童虐待を人任せにしている」状態なのではないだろうか。児童虐待のテレビ等の報道だけを鵜呑みにして、「一体児童相談所の対応は（時には警察は）どうなっているんだ！」などと言う無責任さを反省するが、どのように実態を理解すればいいのかは分からなかった。

本書では、児童相談所の勤務経験者が、分かりやすい文章で実態を明らかにしており、社会的養護関連施設の保育者になる予定の学生たちとも読みあって学びたいと思う内容である。児童虐待について人任せにしないで考える学びは、「子ども主体」の保育を考えることと同様の意味があると思っている。

三好 伸子 (金沢星稜大学)

『レッジョ・エミリアと対話しながら：知の紡ぎ手たちの町と学校』

Carla Rinaldi 著 (里見実 訳)
2019年9月3日 ミネルヴァ書房

本書は、レッジョ・チルドレンの代表であるリナルディによるレッジョの教育哲学に関する語りをまとめ、Routledge社のContesting Early Childhood (幼児期を問い直す) シリーズにて2006年に出版された、In Dialogue with Reggio Emiliaの里見実による邦訳である。リナルディは、幼児期の子どもをどのような存在として見るか、子どもに直接かかわる教師や家族はどのような存在であるか、そして、子ども・教師・家族を取り巻く環境や社会、歴史などがいかに深く教育のあり方に関わっているかについて、我々に問いを提示する。

リナルディの示す問いに答えようと試みることは、保育における政治と倫理、民主主義について考えることにつながる。それは、標準化された尺度による質保証に対するオルタナティブとして、実践と理論に新たな価値やビジョンを与える。リナルディは政治的・倫理的に不断に問い続けることの重要性を、我々に教えてくれる。

矢崎 桂一郎 (東京大学大学院)

会報第179号原稿の募集

広報委員会では、以下の原稿を募集しています。ふるってお寄せください。

①海外レポート

研究や視察などで海外へ行かれた方や、海外在住の方は、海外の研究動向や保育に関わる情報を紹介してください。

②新刊図書の紹介

過去2年間に初版として出版された他者の図書で、興味深いもの、保育にとって有意義と思われるものを、感想を含めて紹介してください。ジャンルは問いません。

③私の文献リストから

研究や実践のために参照されている文献リストをご紹介します。文献は、著書、論文など15冊(編)以内。内容の紹介は必要ありませんが、外国語の文献については、邦訳を付けてください。また、ご自身が、その文献を使って研究しようとしている(関心をもって)分野についても、お書きください。

【字 数】 ①800字以内 (写真1葉は200字に換算)

②400字以内

③800字以内

【締め切り】 2020年9月30日必着

【送付先】 Mail : hoiku@main.so-net.jp

作成いただくデータはWord (windows) ファイルをお願いします。

【投稿者連絡先】 氏名、会員ID、住所、電話、メールアドレスを明記してください。

学 会 記 事

■2019年度事業報告

2019度は、年度途中で3歳以上の保育料無償化が実施され、保育・幼児教育の制度的な社会的位置の変化が生じるなど、待機児解消に留まらない大きな制度的変更が生じる年となりました。必然的に、保育の質の向上が重要な課題になり、国、自治体、各実践現場、そして保育・幼児教育関係団体で質向上への取り組みの強化が予想され期待されます。一般社団法人日本保育学会でも、そのことをふまえた取り組みを強めていきましたが、合わせて学会大会への参加者の増大に見合った大会と大会運営のあり方の検討、幼稚園・保育所の創設と増大がテーマになっているアジア諸国との連携強化、それら全体を含めて学会財政のあり方の検討、若手研究者の研究支援等に取り組みました。

1. 第72回大会の開催

- (1) 大会テーマ：「新しさ」とは何か—保育におけるブリコラージュの視点—

期日：2019年5月4日（土）、5日（日）

会場：大妻女子大学

大会実行委員長：岡健

口頭発表：247件、ポスター発表：653件、自主シンポジウム：55件

大会研究発表総数：955件

- (2) 主たる企画

- ・大会基調講演「私たちは変わったんだろうか／でもその場はきっと今もよい」立岩真也（立命館大学大学院）
- ・大会実行委員会企画
「保育者養成を考える」
「保育の質を支える上で、地方自治体や保育関係団体が果たす役割とは何か」
「保育の質的な向上を園内研修で具現化するために」
「保育・支援の質向上に子どもの権利をどう生かすのか」
- ・国際シンポジウム「国の教育課程の改訂は、保育実践の場に何をもちたすか？—ヌリ課程改訂の内容・過程と特徴から考える—」
- ・学会企画シンポジウム2件：編集常任委員会・課題研究委員会

2. 第73回大会準備

期日：2020年5月16日（土）、17日（日）

会場：奈良教育大学

大会実行委員長：奈良教育大学 横山真貴子

3. 第74回大会準備

期日：2021年5月15日（土）、16日（日）予定

会場：富山大学・富山国際大学

大会実行委員長：富山大学 小林真

4. 学会誌『保育学研究』の発行

- (1) 第57巻第1号・第2号・第3号の発行（第3号特集テーマ：葛藤が生起する場としての保育）
- (2) 第58巻の投稿受付と発行準備（第3号特集テーマ：保育の場における現職教育のあり方について）
- (3) 第59巻の募集と発行準備（第3号特集テーマ：保育者のキャリア支援）

5. 社員総会、評議員会、理事会の開催

- (1) 社員総会及び理事・評議員会・地区ブロック評議員会（於第72回大会）の開催
- (2) 理事会（4月13日、9月14日、2月8日）の開催

6. 名誉会員の認定

認定者なし

7. 各種委員会の開催

開催した委員会：編集常任委員会 国際交流委員会 課題研究委員会 広報委員会 組織検討委員会 研究奨励賞推薦委員会及び同選考委員会 保育学文献賞推薦委員会及び同選考委員会 大会検討委員会 名簿作成委員会 選挙管理委員会 倫理問題調査委員会

8. 『日本保育学会会報』の発行

第174号、175号、176号の発行

9. 日本保育学会研究奨励賞の授与

清水道代「東京府女子師範学校附属学校園における遊戯的学習の実践と幼小接続に関する一考察—第一部（幼稚園・尋常小学校一年）の実践的展開に着目して—」

北田沙也加「異年齢保育における幼児の乳児に対する養育的行動」

10. 日本保育学会保育学文献賞の授与

東海ジェンダー研究所『資料集 名古屋における共同保育所運動—1960年代～1970年代を中心に—』日本評論社

富田昌平『幼児期における空想世界に対する認識の発達』風間書房

11. 研究集会開催の助成

中部地区ブロック

「保育の質の向上—あそびを通じた総合的指導の探究」2019年12月1日 於静岡県立大学短期大学部

九州・沖縄地区ブロック

「時代の変化に対応し地域に密着した子育て支援の方策を探る」2020年2月16日 於尚絅大学短期大学部

12. 国際交流

- (1) 国際シンポジウムの開催
- (2) 韓国嬰幼兒保育学会及び韓国幼児教育学会との学術交流

- (3) 主要国際保育系学会への若手会員派遣の募集
- (4) 国際保育資料データベースの収集

■2020年度事業計画 (2020.4.11現在)

グローバル化という社会の動き・流れは、おそらく中国の一部にいたコウモリが所有していたウィルス、コロナウィルスをあつという間に世界中に広げるといふ現象を呼び起こしました。この動き・流れが避けられないのであれば、人類は、今後、今回のような出来事に頻繁に巻き込まれる可能性をもっていることを覚悟しなければならないということになるでしょう。

他方で、今回のウィルス騒ぎは、病魔は人類に平等に襲うということ、その限り、人間は生命としてはみな平等であることを突きつけましたが、しかしそこから脱却する可能性については、平等とは限らないことを示しています。

まだ渦中にあるので、確定的なことは言えないにしても、われわれは、この災いから何を学び、どのようにそれをこれからの歴史に活かしていくのか。そこに、人としての、生命としての深い知恵が問われています。一般社団法人日本保育学会は、この影響を受け、今回、一同に会して大会をひらくことができません。それはとても無念なことでありますが、その無念さから私たちは何を導き出すのか。将来の会員が、第73回大会はコロナウィルス騒ぎで大会が開かれなかったとだけ語るのか、あのときからかくかくのことが日本の保育と保育学で深く問われるようになったのだ、と語るのか、が今問われていると思うのです。

さて、保育の世界では、新要領、新指針、新教育保育要領が施行されて、現場では今、保育の質を高めることが共通の課題になってきています。

保育は子どもたちの現在と将来の幸せを支える営みですが、子どもたちが生きるその社会が、今回の例に待つまでもなく多様な課題をはらんでいるのだとしたら、その課題を、そこで生きる人達が平等にしあわせを追求できる方向で解決していくことが、人類に共通の課題になるのではないのでしょうか。当然、保育の内容、質を評価する場合も、それが最大の指標になるはずです。なぜなら、社会の共通の期待に応える実践を行うことが保育・教育の内容・質の指標になるからです。

しかし、現実には、そうした質の追求を妨げる要素が保育の世界には多く存在します。待機児問題、極端な少子化、外国人の子どもへの漸増、貧困と家族機能の崩壊等々。こうした問題と真正面から切り結ぶ実践の交流、理論的深化を学会は推進していきたいと思っています。

他方で、グローバル化は、保育が各国の中だけの営みではなく、グローバル社会のインフラとなりつつあるという現実も到来しています。とくに東南ア

ジア諸国の社会変化ははげしく、そこで保育の充実が社会の大きな課題になってきています。当然、ヨーロッパのように、アジアというより大きなくくりの中で保育を考える必要のある時代がすぐ来ます。そうした視点で国際交流を深めていきたいと願っています。

また、AI社会が近づきつつあり、そうした文化と社会の変容の中での子どもの人間性の実現ということもこれからの社会の大きな課題になってきていて、そうした視点で保育を見直し評価することも肝要になってきています。

その他、環境問題等が切実な社会課題になってきている中で、保育もSDGsを念頭において、それを実践することが、保育が社会の新しい流れと合流していく大事な視点になると考えられます。こうした視点で、21世紀中盤にさしかかる時期の保育と保育学の創造に力を尽くしたいと思います。

1. 第73回大会の開催

- (1) 大会テーマ：「保育の“とこしえ”と“うつろい”」
 期日：2020年5月16日(土)、17日(日)
 会場：奈良教育大学、なら100年会館
 大会実行委員長：横山真貴子
 口頭発表：262件、ポスター発表：749件、自主シンポジウム：66件
 大会研究発表総数：1,011件

(2) 主たる企画

- ・大会基調講演「ヒトの心の成り立ちをたどる—発達と進化の基盤」明和政子(京都大学)
- ・大会実行委員会企画
 「保育の“とこしへ”と“うつろい”—倉橋惣三と日本の保育の今とこれから」
 「スウェーデンの新カリキュラムとPlay-Responsive ECEC—スウェーデンの実践から私たちは何を学ぶか—」
 「いかに園の保育の質を高めるか—自治体・団体の取り組みを踏まえての実践」
 「保育実践の解釈行為から今後の要領・指針を考える—領域に関する専門性とは—」
- ・国際シンポジウム「ドイツにおける保育の現状と質の維持について—乳児保育の視点から—」
- ・学会企画シンポジウム2件：
 編集常任委員会「実践研究へのいざないⅢ—主観性と客観性の対立を越える道を探る—」
 課題研究委員会「幼保一体化の課題と展望Ⅳ—認定こども園全国調査のまとめ—」

2. 第74回大会準備

- 大会テーマ：「つながる、広がる、深まる」
 期日：2021年5月15日(土)、16日(日) 予定
 会場：富山大学・富山国際大学
 大会実行委員長：富山大学 小林真

3. 第75回大会準備(関東ブロック)

- 期日：未定

会場：未定
大会実行委員長：未定

4. 学会誌『保育学研究』の発行

- (1) 第58巻第1号・第2号・第3号の発行（第3号特集テーマ：保育の場における現職教育のあり方について）
- (2) 第59巻の投稿受付と発行準備（第3号特集テーマ：保育者のキャリア支援）
- (3) 第60巻の募集と発行準備（第3号特集テーマ：保育の質の向上及び子育て支援の充実に向けた取り組み—地域レベルの試みに焦点を当てて—）

5. 社員総会、評議員会、理事会の開催

- (1) 社員総会及び理事・評議員会・地区ブロック評議員会の開催

- (2) 理事会（4月11日、9月・2月開催日未定）の開催

6. 名誉会員の認定

7. 各種委員会の開催

開催予定の委員会：編集常任委員会 国際交流委員会 課題研究委員会 広報委員会 組織検討委員会 研究奨励賞推薦委員会及び同選考委員会 保育学文献賞推薦委員会及び同選考委員会 大会検討委員会 倫理問題調査委員会

8. 『日本保育学会会報』の発行

- (1) 第177号、178号、179号の発行

9. 日本保育学会研究奨励賞（発表・論文部門）の授与

10. 日本保育学会保育学文献賞の授与

11. 研究集会開催の助成

12. 国際交流

- (1) 国際シンポジウムの開催
- (2) 韓国嬰幼兒保育学会及び韓国幼児教育学会との学術交流
- (3) 主要国際保育系学会への若手会員派遣の募集
- (4) 国際保育資料データベースの収集

13. その他

- (1) その他必要な事業

その他無形固定資産	18,000	126,000	△108,000
敷金	1,113,200	1,113,200	0
その他固定資産合計	1,265,011	1,373,011	△108,000
固定資産合計	47,751,882	47,846,990	△95,108
資産合計	73,011,285	93,201,992	△20,190,707
〔負債の部〕			
【流動負債】			
未払金	1,396,920	0	1,396,920
前受金	722,000	1,042,325	△320,325
預り金	279,418	347,878	△68,460
流動負債合計	2,398,338	1,390,203	1,008,135
負債合計	2,398,338	1,390,203	1,008,135
〔正味財産の部〕			
【一般正味財産】	70,612,947	91,811,789	△21,198,842
（うち基本財産への充当額）	(34,054,483)	(34,052,647)	(1,836)
（うち特定資産への充当額）	(12,432,388)	(12,421,332)	(11,056)
正味財産合計	70,612,947	91,811,789	△21,198,842
負債及び正味財産合計	73,011,285	93,201,992	△20,190,707

正味財産増減計算書

自 2019年4月1日 至 2020年3月31日 (単位：円)

科目	当年度	前年度	増減
〔一般正味財産増減の部〕			
〔経常増減の部〕			
〔経常収益〕			
【基本財産運用益】			
基本財産受取利息	2,592	346,360	△343,768
【特定資産運用益】			
特定資産受取利息	1,056	2,135	△1,079
【受取入会金】			
受取入会金	500,000	516,000	△16,000
【受取会費】			
受取会費	44,434,800	42,026,000	2,408,800
【事業収益】			
事業収益	27,652,980	29,632,359	△1,979,379
【受取寄付金】			
受取寄付金	14,000	0	14,000
【雑収益】			
雑収益	7,360	14,767	△7,407
経常収益計	72,612,788	72,537,621	75,167
〔経常費用〕			
【事業費】			
給料手当	0	0	0
臨時雇賃金	3,979,500	2,418,875	1,560,625
福利厚生費	9,776	0	9,776
広告宣伝費	0	270,000	△270,000
会議費	838,443	694,454	143,989
旅費交通費	2,812,616	4,427,099	△1,614,483
通信運搬費	4,027,804	6,585,869	△2,558,065
消耗品費	953,777	206,875	746,902
印刷製本費	10,677,649	8,133,669	2,543,980
賃借料	3,595,922	59,183	3,536,739
諸謝金	908,390	1,030,289	△121,899
賞金・助成金・分担金	594,449	1,165,519	△571,070
委託費	35,353,438	37,397,180	△2,043,742
雑費	17,210	277,763	△260,553
【管理費】			
給料手当	11,102,176	14,455,110	△3,352,934
法定福利費	2,120,555	2,394,056	△273,501
福利厚生費	38,322	10,000	28,322
その他人件費	585,508	635,500	△49,992
接待交際費	8,640	19,375	△10,735
会議費	487,214	74,792	412,422
旅費交通費	2,101,867	1,774,394	327,473
通信運搬費	1,428,612	144,285	1,284,327
減価償却費	290,884	172,314	118,570
消耗什器備品費	305,708	408,511	△102,803
消耗品費	759,001	612,053	146,948
修繕費	0	158,726	△158,726
印刷製本費	3,481,696	0	3,481,696
水道光熱費	135,359	107,197	28,162
賃借料	3,928,171	3,838,836	89,335
保険料	21,070	6,000	15,070
諸謝金	902,204	870,484	31,720
租税公課	591,800	668,900	△77,100
雑費	30,483	27,042	3,441
振込手数料	914,483	574,848	339,635
委託費	757,500	664,200	93,300
慶弔費	51,403	3,392	48,011
経常費用計	93,811,630	90,286,790	3,524,840
当期経常増減額	-21,198,842	-17,749,169	△3,449,673

貸借対照表

2020年3月31日現在 (単位：円)

科目	当年度	前年度	増減
〔資産の部〕			
【流動資産】			
現金預金	21,616,174	43,272,278	△21,656,104
貯蔵品	769,010	712,803	56,207
前払費用	174,219	164,790	9,429
仮払金	2,700,000	1,205,131	1,494,869
流動資産合計	25,259,403	45,355,002	△20,095,599
【固定資産】			
（基本財産）			
預貯金	34,054,483	34,052,647	1,836
基本財産合計	34,054,483	34,052,647	1,836
（特定資産）			
研究奨励賞引当資産	6,981,083	6,970,490	10,593
保育学文献賞引当資産	5,451,305	5,450,842	463
特定資産合計	12,432,388	12,421,332	11,056
（その他固定資産）			
什器備品	1,413,803	1,413,803	0
減価償却累計額	△1,279,992	△1,279,992	0

〔経常外増減の部〕			
当期経常外増減額	0	0	0
税引き前当期一般正味財産増減額	-21,198,842	-17,749,169	△3,449,673
当期一般正味財産増減額	-21,198,842	-17,749,169	△3,449,673
一般正味財産期首残高	91,811,789	109,560,958	△17,749,169
一般正味財産期末残高	70,612,947	91,811,789	△21,198,842
正味財産期末残高	70,612,947	91,811,789	△21,198,842

1.重要な会計方針

- (1) 固定資産の減価償却の方法 定額法
- (2) 棚卸資産の評価基準 個別法
- (3) リース取引の処理方法 賃貸借取引に準じた方法
- (4) 消費税等の会計処理 税込み処理

2.基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
預貯金	34,052,647	1,836	0	34,054,483
小 計	34,052,647	1,836	0	34,054,483
特定資産				
研究奨励賞基金	6,970,490	10,593		6,981,083
保育学文献賞基金	5,450,842	463		5,451,305
小 計	12,421,332	11,056	0	12,432,388
合 計	46,473,979	12,892	0	46,486,871

3.補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高

補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高は、次のとおりである

補助金等の名称および交付者	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
研究成果公開促進費				
日本学術振興会	0	0	0	0
合 計	0	0	0	0

財産目録

2020年3月31日現在 (単位: 円)

科 目	金 額	
〔資産の部〕		
【流動資産】		
現金預金	21,616,174	
貯蔵品	769,010	
前払費用	174,219	
仮払金	2,700,000	
流動資産合計		25,259,403
【固定資産】		
(基本財産)		
預貯金	34,054,483	
基本財産合計	34,054,483	
(特定資産)		
研究奨励賞引当資産	6,981,083	
保育学文献賞引当資産	5,451,305	
特定資産合計	12,432,388	
(その他固定資産)		
什器備品	1,413,803	
減価償却累計額	△1,279,992	
その他無形固定資産	18,000	
敷金	1,113,200	
その他固定資産合計	1,265,011	
固定資産合計		47,751,882
資産合計		73,011,285
〔負債の部〕		
【流動負債】		
未払金	1,396,920	
前受金	722,000	
預り金	279,418	
流動負債合計		2,398,338
負債合計		2,398,338
正味財産		70,612,947

2020年度 収支予算書

2020年4月1日から2021年3月31日まで (単位: 円)

科 目	2020年度予算	2019年度予算 (参考)
〔事業活動収支の部〕		
(事業活動収入)		
【基本財産運用収入】		
基本財産利息収入	2,000	2,000
【特定資産運用収入】		
特定資産利息収入	1,000	1,100
【入金収入】		
入金収入	550,000	534,000
【会費収入】		
会費収入	44,600,000	45,344,200
【事業収入】		
事業収入	15,160,000	31,018,800
【寄付金収入】		
寄付金収入	0	0
【雑収入】		
雑収入	6,000	74,000
事業活動収入計	60,319,000	76,974,100
(事業活動支出)		
【事業費支出】		
給料手当支出	0	0
臨時雇賃金支出	0	2,500,000
福利厚生費支出	10,000	0
広告宣伝費支出	0	0
接待交際費支出	0	0
会議費支出	383,000	285,000
旅費交通費支出	3,045,000	2,190,000
通信運搬費支出	4,565,000	3,707,000
消耗品費支出	2,000	50,500
印刷製本費支出	7,345,000	8,160,000
水道光熱費支出	0	0
賃借料支出	57,000	2,770,000
諸謝金支出	20,000	676,000
賞品・助成金・分担金支出	2,025,000	1,884,000
委託費支出	16,605,000	27,895,000
雑支出	65,000	62,000
【管理費支出】		
給料手当支出	12,035,000	12,519,000
法定福利費支出	1,700,000	1,737,000
福利厚生費支出	40,000	40,000
その他人件費支出	400,000	810,000
広告宣伝費支出	0	0
接待交際費支出	20,000	35,000
会議費支出	118,000	177,000
旅費交通費支出	2,135,000	2,761,500
通信運搬費支出	176,000	1,171,000
消耗什器備品費支出	500,000	430,000
消耗品費支出	600,000	500,000
修繕費支出	300,000	100,000
印刷製本費支出	50,000	2,910,000
水道光熱費支出	150,000	120,000
賃借料支出	4,115,000	4,242,000
保険料支出	25,000	15,000
諸謝金支出	1,220,000	820,000
租税公課支出	600,000	580,000
雑支出	35,000	30,000
振込手数料支出	930,000	550,000
委託費支出	790,000	725,000
慶弔費支出	50,000	50,000
事業活動支出計	60,111,000	80,502,000
事業活動収支差額	208,000	△3,527,900
(投資活動収支の部)		
(投資活動収入)		
【特定資産取崩収入】		
特定資産取崩収入	0	0
投資活動収入計	0	0
(投資活動支出)		
【特定資産取得支出】		
特定資産取得支出	0	0
投資活動支出計	0	0
投資活動収支差額	0	0
(財務活動収支の部)		
(財務活動収入)		
財務活動収入計	0	0
(投資活動支出)		
財務活動支出計	0	0
財務活動収支差額	0	0
【予備費支出】		
予備費支出	100,000	100,000
当期収支差額	108,000	△3,627,900
次期繰越収支差額	108,000	△3,627,900

各種委員会報告

■編集常任委員会

2019-6/2 7/13 11/29

2020-1/13

1. 『保育学研究』誌の発行と編集
第57巻第1号～第3号の発行
特集テーマ：葛藤が生起する場としての保育
展望：保育者養成者のおかれている現状と課題
—実践者と共に創る保育者養成—
保育フォーラム：保育学の研究方法論を考える
(3) 国際比較研究—これからのグローバル・ガバナンスを考える—
第58巻第1号～第3号の編集作業
2. 編集常任委員会企画シンポジウムの取り下げ
第73回大会において「実践研究へのいざないⅢ～主観性と客観性の対立を越える道をさぐる～」というテーマで開催を予定していたが、大会が会場に参集しないこととなったため、取り下げとし、第74回大会で開催予定である。
3. 電子投稿
投稿のほとんどが電子投稿となった。電子投稿で生じる課題を今後検討していくことにする。
第60巻からは電子投稿のみとなる。
(文責：小川 清実)

■国際交流委員会

2019-8/1 10/21

2020-3/23 (メール審議)

1. 日本保育学会第73回大会国際シンポジウムの企画
国際交流委員会、大会実行委員会、OMEP日本委員会の共同で企画した。テーマは「ドイツにおける乳幼児期の保育の質について—保育政策の動向を踏まえて—」で、基調講演の講師は、Susanne Viernickel氏 (ライプツィヒ大学)、指定討論者は、秋田喜代美氏 (東京大学)、中西さやか氏 (名寄市立大学) であった。
大会が会場に参集しない開催であったために本企画での国際シンポジウムの取り下げ申請を行った。
2. 国際学会への若手派遣の助成申請は無かった。
申請条件を拡充した規約改正を行った。
3. 諸外国の「幼児教育ガイドライン」のHPへの掲載
韓国、中国、ニュージーランド、スウェーデンに加えてドイツのガイドラインの概要をHPに掲載した。
4. 第2回若手派遣国際ワークショップ
2020年2月16日にNAEYCとPECERAの2学会について、定員40名の参加型ワークショップを行った。質疑応答が活発になされ、参加者の満足度

は高かった。

(文責：岩立 京子)

■課題研究委員会

2019-5/3 6/1 9/25 12/12 2/16

2020年-2/16 3/31コロナ対応のため中止 (5回)

委員会では、「幼保一体化の課題と展望」調査を継続して実施。1年目、先行研究のレビューを行い、整理。2年目、全ブロック予備調査を実施、本調査票作成。3年目は、本調査を実施し分析を行った。本年度4年目は、本調査の報告書を作成した。

具体的な取り組みとしては以下の通りである。

1. 2019年度(4年目)は、本調査の報告書を作成した。本調査の報告書及びリーフレットを300部発行し、関係省庁、都道府県庁、予備調査協力園、学会理事・評議員などに配布を行う。ホームページにアップし、公表する(理事会承認)。
2. 日本保育学会第73回大会(奈良教育大学)は新型コロナウイルス感染症対策として対面実施は中止となったが、「課題研究委員会」として取りまとめた「幼保一体化の課題と展望Ⅳ—認定こども園全国調査のまとめ—」について発表した。研究報告者は、岸井 慶子(東京家政大学)、浜口 順子(お茶の水女子大学)、話題提供者は、行政の立場から大前 睦美(奈良市子ども未来部 保育総務課)、こども園としての立場から村手 敦(幼保連携型認定こども園九品寺幼稚園)が報告した。指定討論は、汐見 稔幸氏(白梅学園大学名誉学長・日本保育学会会長)であり、司会は三宅 茂夫氏(神戸女子大学)、説明趣旨は大方 美香(大阪総合保育大学・課題研究委員会委員長)であった。
(文責：大方 美香)

■広報委員会

2019年5月～2020年4月まで

日本保育学会広報委員会は、2019年の5月より178号のまでの間に、174号「保育の新時代への挑戦」175号「第72回大会レポート」176号「子どもが人として大切にされる社会」177号「教育・保育の無償化—令和時代の保育学—」そして178号を発行することが出来た。広報委員会の皆様とは、保育学会として出来るだけ時代の変化の合わせた内容を取り上げ、会員の皆様に少しでも楽しく、そして役立つ内容になるように議論してきた。特に2019年の10月には幼児教育・保育の無償化が始まり、正に令和時代の保育学の幕開けとなった。

しかし、新型コロナウイルスに対する新たな対応が必要となり、予定していたことが実現出来ない状況が多くある。特に保育学会第73回大会を参集しな

い方向での実施となった事は、大会実行委員会の皆様、会員の皆様にとっては本当に残念な事であった。新型コロナウイルスと向き合い、新たな保育現場の方向を見据え、今後の会報の特集等を検討していきたい。

(文責：若月 芳浩)

■日本保育学会研究奨励賞

発表部門推薦委員会 2019/5/5

発表部門選考委員会 2019/12/13

発表部門推薦委員会で推薦された発表のうち、規定に則って対象となった10編を対象として、委員5名全員で慎重に審議した。その結果、次の3件、佐々木美和「羽仁もと子の児童読み物観について―「思想しつつ生活しつつ」の実践としての読書―」、松田こずえ「ノルウェーの保育において男女平等教育はいかに目指されたのか」、山田恵美・小林直実「降園活動における着座と人間関係の発達(5)―入園から卒園まで―」を授賞候補とした。そして、理事会、理事・評議員会に報告し、承認を得た。

(文責：秋田 喜代美)

論文部門選考委員会 2020/1/7

2019年度「研究奨励賞(論文部門)」の対象に該当する論文は、『保育学研究』第57巻掲載論文中19件であった。本委員会において、研究奨励賞(論文部門)にふさわしい論文を厳正に審査した結果、次の2編に決定し、その後理事会に報告し、承認を受け確定した。小林佳美「私立保育所保育士の賃金の低下と影響要因―1980年以降の都道府県別時系列集計データによる実証分析―」、本岡 美保子「乳児保育における葛藤の意義―乳児と保育者の相互作用に着目して―」

(文責：戸田 雅美)

■保育学文献賞選考委員会

2019-12/21

当該委員会は、規定に則って2018年5月1日から2019年4月30日までに発刊された保育学の発展及び保育実践の向上にとり非常に有意義である優れた単行本として、次の1点を選定した。

1. 福元真由美(著)『都市に誕生した保育の系譜―アソシエーションイズムと郊外のユートピア』世織書房2019年1月

以上について、当該委員会は保育学文献賞候補として、理事会及び理事・評議員会に提案し、承認を得たことを報告する。

(文責：西本 望)

■組織検討委員会

これまで、組織検討委員会では主として事業部門について扱ってきた。一方、学会の管理部門(事務局体制)については、報告事項となっていたところを、理事会の審議事項とすることを、理事会の議を経て決定した。

また、近年の大会関連委託費の増加を抑制するため、事務局において大会関係の業務を引き受けられるよう体制整備をすることを決定した。また、理事会との円滑な連携を図るため、事務局に事務局長をおくこととし、2020年3月1日付で、戸谷すずか氏を事務局長に任命することとした。また、大会関連業務移行プロジェクトのリーダーとして、東井弥沙氏を3年の任期で任命した。

(委員長：汐見 稔幸、文責：戸田 雅美)

■名簿作成委員会

2018年12月の委員会で決定した事項(名簿への記載内容・対象となる者の条件・体裁・プライバシーポリシーの追記等)をもとに名簿の作成を行った。6000名を超える会員の情報を従来の方法で収集し、事務局がチェックするのはあまりに労力が大きいということになり、稼働し始めた会員登録システムを利用して、会員自らが自分の情報を修正する方法に変更し、無事に2019年12月に発行した。

(文責：河邊 貴子)

■選挙管理委員会

2019-7/9

2020-1/27 1/30

選挙管理委員会では、本学会の役員選挙に関わる規定に則って、2019年度役員選挙を実施し、2020年1月30日に投票結果を会長に報告した。2019年度役員選挙における有権者数5,153人で、白票を含む有効投票数は782票であり、投票率は15.2%であった。さらに、投票の実施とその結果について、2月8日常任理事会に報告した後、役員として選出された会員について個別に承諾を得た後、3月23日に2019年度役員選挙の最終結果として会長に報告した。選出された評議員は全国区7名、地方区39名である。

以上、2019年度役員選挙が滞りなく実施したことを報告する。

(文責：神長 美津子)

■ 第74回大会開催（予告） ■

2021年5月15日（土）・16日（日）
富山大学・富山国際会議場（中部ブロック）

◆第74回大会のお願い及び注意事項

- ・会場数に限りがございます。自主シンポジウムは50件、口頭発表は200件、ポスター発表は800件の制限を設けています。申込件数が大幅に超えた場合には、抽選を行います。
- ・各種申込みは、大会ホームページよりWeb登録となります。期日や提出物に不備がある場合は、受理できませんのでご注意ください。
- ・申し込みをする際に、会員IDが必要です。会員IDは、第1号通信及び本学会から送付する封筒の宛名シール下部に記載された8桁の数字です。
- ・大会参加費が変更となりました。金額をご確認の上、お支払いください。

◆研究発表について

- ・発表時には、未発表であるものに限りです。発表申込み・発表論文集原稿提出以降、発表前に他団体において印刷・公表された研究は、発表することができませんので、ご注意ください。
- ・筆頭発表は1人1回に限りです。連名発表者となる場合には、筆頭発表も含めて3発表まで認められています。
- ・1発表は筆頭発表者を含め10名を上限とします。
- ・発表の際、筆頭発表者は必ず出席しなければなりません。ただし、連名発表者の出席は必須としません。
- ・発表申込みに際しては、本学会の大会研究発表に関する規程を遵守してください。大会終了後、審査の結果、違反のあった場合は、発表取り消しのご連絡をする場合があります。日本保育学会倫理綱領に基づいた発表をお願いいたします。
- ・発表申込みの受理結果は、2020年11月下旬に大会ホームページに掲載いたします。会員各自で、ご確認ください。

◆自主シンポジウムについて

- ・登壇は1人1件です。
- ・連名登壇者が非会員である場合、その方の大会参加費を、筆頭登壇者が2021年1月12日までに納入してください。

◆発表論文集原稿について

- ・発表論文集原稿の分量は、1発表につき、A4判2枚です。おおよその分量を満たしていない原稿は、受理されない場合がありますのでご注意ください。

	自主シン ポジウム	口頭・ ポスター 発表	大会参加のみ
学会年会費の納入	2020年9月30日		2021年1月12日
大会参加申込	2020年10月26日 ～11月15日		2020年11月16日 ～2021年1月12日
企画・発表申込	2020年10月26日 ～11月15日		—
原稿登録期限	2021年1月12日		—
大会参加費・発表登録 費・自主シンポジウム 開催登録費納入	2021年1月12日		2021年1月12日

第74回大会ホームページ
<http://hoiku74.jp/>

編集後記

第73回大会実行委員長である横山真貴子先生は、今回の大会が参集出来なかった事について、大変貴重なご意見を執筆してくださいました。大変な準備などの労苦があったにもかかわらず「新たな時代を保育を問う契機となることを願う」と前向きなご意見を書かれています。本当にご苦労様でした。

新型コロナウイルスは社会に多大なる影響を与え、保育の世界は新たな日常の中での感染予防に対して必死になる状況があります。乳幼児の育ちや保護者の安心のためには、保育現場は過去に経験のない工夫や取り組みが求められ、その実情も見えてきました。そこで178号では現場での取り組みや研究者の声を聞き、新型コロナウイルスへの対応を含んだ内容で構成することになりました。広報委員の皆様からの多大なるお知恵をいただき、何とか発行することが出来ました。3密を防ぐ事が何よりも難しい保育の中での今後の取り組みについて、今後も多くの実践者や研究者の皆様にご意見をいただき、学会員の皆様と共有出来ればと考えております。

編集：広報委員会

若月芳浩 天野美和子 有村玲香 伊藤能之 木村創 森田健宏 淀川裕美

広報委員会協力委員

今津尚子 佐久間美智雄